

「ご当地検定」と地域振興

～これから発揮される「かごしま検定」の効果～

2006年4月

「かごしま検定」を振り返る

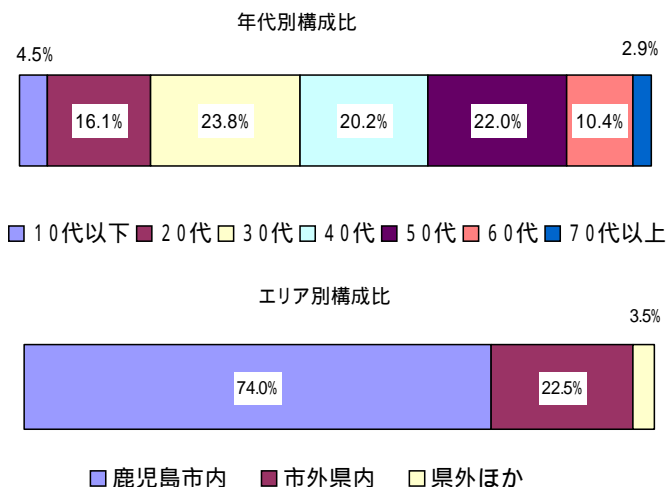
2006年4月16日、鹿児島市内で、鹿児島商工会議所主催の「かごしま検定（正式名称：鹿児島観光・文化検定）」が実施された。これは、鹿児島に関する自然・歴史・文化・地域・産業経済などの知識を、テキストやセミナーを通じて学習し、試験でその成果を問うものである。実施の目的としては、「九州新幹線の全線開業を5年後に控え、鹿児島では、魅力ある街づくりとともに、全県的な観光に向けたソフトの推進が求められて」いるとの認識の下、「県内外を問わず、多くの方々が、鹿児島への関心を持っていただくとともに、一人でも多くの鹿児島ファンを増やしていく」ⁱことであるとされた。

図表1 「かごしま検定」テキスト



検定レベルは難易度によって3段階に分かれているが、今回は第1回ということもあって「かごしまマスター試験（初級に該当）」のみであった。今後、順次「鹿児島シニアマスター試験（中級に該当）」、「上級試験（名称未定）」の試験を実施する予定で

(図表2) 「かごしま検定」受験申込者の属性



出典：鹿児島商工会議所資料

あるⁱⁱ。合格者に対しては合格通知書が交付される。

受験者数は当初予想を大幅に上回る約2,300人、事前に開催された受験対策セミナーも2日間で約1,000人が詰めかけた。また、テキストも既に約6千部販売された。地元マスコミも大々的に取り上げ、ちょっとしたブームが生じた。

今回の試験の申込者(2,459人)の属性を鹿児島商工会議所の資料でみると、30代から50代までがそれぞれ20%強を占めているところが特徴的である。また、エリア別にみると、鹿児島市内からの申込がおよそ4分の3を占めている(図表2)。また、社員に受験を奨励する企業もあり、受験者数の増加に寄与したといわれている。

合格率などは現段階では明らかにされていないが、受験者の反応もよく、新聞紙上でも「県内のことをもっと知りたい、と挑戦した。離島の知識など新たな発見もあった。ふるさとを再発見するいい機会」ⁱⁱⁱといった受験者の声が紹介されていた。

このように「かごしま検定」は大ヒットでスタートした。実現に奔走した事務当局の方々の苦勞を目の当たりにしている筆者としては、大変喜ばしく思っている。

本稿では、この「かごしま検定」をはじめ、全国で注目されている「ご当地検定」について、その特徴と今後の方向性について、地域振興のツールという観点から検討してみることとしたい。(なお、筆者は「かごしま検定」にテキスト作成などを通じて関与しているが、本稿での見解は、あくまで筆者個人のものであることを予めお断りする。)

「ご当地検定」とは

この「かごしま検定」は、最近各地で次々と生まれている「ご当地検定」の一つに数えられているが、それではそもそも「ご当地検定」とは何なのであろうか。

「ご当地検定」とは、一般的には、地域の観光協会や商工会議所などが実施する、地域の歴史、自然、文化、観光、産業などについての知識に関する試験のこと^{iv}を指している。

「ご当地検定」の草分けとされるのが、(財)東京観光財団と東京商工会議所が2003年から現在まで、計3回実施している「東京シティガイド検定」である。第1回検定では東京の自然、歴史、産業など全8分野から出題され、約1,100人が応募し、約790人が合格した。また、翌2004年には京都商工会議所が「京都・観光文化検定(通称京都検定)」を

(図表3) 最近の主な地域検定実施事例

開始年	検定試験名	主催団体	開始年	検定試験名	主催団体
2003年	東京シティガイド検定	東京観光財団、東京商工会議所	2006年	(4月19日現在)	
	ナマハゲ伝導士認定試験	男鹿市観光協会	実施	ふるさと小松検定	県立小松商業高校
2004年	札幌シティガイド検定	札幌商工会議所	済み	信州観光文化検定	信州観光文化検定協会
	沖縄旅行地理検定	旅行地理検定協会		明石・タコ検定	明石中心市街地まちづくり推進会議
	京都検定	京都商工会議所		長崎検定	長崎商工会議所
2005年	九州観光マスター検定	福岡商工会議所	実施	姫路・観光文化検定	姫路商工会議所
	萩ものしり検定	萩市	予定	かごしま検定	鹿児島商工会議所
	金沢検定	金沢経済同友会		ジュニア京都検定	京都市
	岡山文化観光検定	岡山商工会議所		江戸文化歴史検定	江戸東京博物館
	彦根城下町検定	滋賀県彦根商店街連盟		松本検定	松本市
	北海道フードマイスター	札幌商工会議所		北海道観光マスター検定	北海道商工会議所連合会
	宇和島「通」歴史・文化検定	宇和島市生活文化若者塾「拓己塾」		観光検定	徳島県観光協会
				六甲・摩耶学検定	神戸市
				奈良まほろばソムリエ検定	奈良商工会議所

出典：辻田[2005]をもとに筆者加筆

実施し、第1回検定では全国から約9,800人が受験したということで話題になった^v。この京都検定の成功がきっかけとなって「ご当地検定」は急速な盛り上がりを見せ、以降年々実施される検定数は増加、現在はブームの様相を見せている(図表3)。

これらをみると、「ご当地検定」には大まかにいって3つの類型があると考えられる^{vi}。

(1) 人材育成型

第1の類型は、観光などの人材育成を通じて地域産業の活性化を図ろうとする産業政策的な方向性を持つ、いわば「人材育成型」である。最初の「ご当地検定」がいみじくも「東京シティガイド検定」であったように、ガイドとしての能力を評価する検定であった。「検定」がそもそも能力開発のツールであることを考えれば、「ご当地検定」が観光にかかわる人材育成からスタートしたことも理解できる。その後も観光人材の能力向上を目指した「札幌シティガイド検定」や「九州観光マスター検定」、地域の食にかかわる知識のレベルを問う「北海道フードマイスター」などの取り組みが行われた。これらの「ご当地検定」はいずれも、事業規模が大きく、合格後も能力向上や就職・起業のフォローアップに注力しているところに特徴がある。たとえば、「北海道フードマイスター」は希望者にマイスター資格者を優先的に雇用する求人先の情報提供や、開業希望者への各種の支援制度の紹介など、同地域の基幹産業である「食」に関わる産業の人材強化策を明確に打ち出している。

(2) 地域学型

第2の類型は、ある特定の地域や分野の知識を問うことで、その地域の魅力を見直していく、いわば「地域学型」である。近年「奄美学」や「長崎学」といったように、特定の地域の自然や文化を学ぶことを通じて地域づくりへの動機付けを図ることを目的に、地域住民など多様な主体による生涯学習的スタイルで行っている一連の活動を「地域学」と称す

ることがあるが^{vii}、その活動の一環として「ご当地検定」が行われるのが、この類型である。

この類型の取り組みでは、資格獲得というよりも、地域の「『通』になること」「再認識をすること」「理解を深めること」などを、その目的に掲げている。また、地元高校、地域づくりグループ、TMOなどが実施主体となっているケースもある。実施内容も全体的に規模が小さく、学習、試験中心のものが多くようである。ただ中には、合格者を地域づくりのネットワークの中に組み込もうとする方向性を検討している取り組みもある。たとえば、「萩ものしり検定」は市営萩博物館が中心となって行っている「萩まちじゅう博物館」プロジェクトの一環として実施されている検定であるが、現在合格者に対しフォローアップの講演会や茶話会を行うことでネットワーク化を図ろうとしている。加えて上級合格者(萩ものしり博士)には「萩まちじゅう博物館」プロジェクトなど地域づくり活動への積極的な関与をしてもらおうとしている。

その他の事例：「宇和島「通」歴史・文化検定」、「明石・タコ検定」など

(3) 中間型

第3の類型が「人材育成型」と「地域学型」の「中間型」である。この類型ではその多くが「地域を知る」ことと、「もてなしの質を高める」こと双方を実施目的に掲げており、「観光文化検定」を名乗るところが多いのも特徴である。「かごしま検定」もこの類型に入るであろう。これらの取り組みは、いずれも商工会議所などが主催した規模の大きいものが多い。また多段階の級を設定して、広範な受験者の受け皿を作るケースが多いのも特徴である。他方「人材育成型」のような合格者の対する資格としてのフォローアップを行うよりも、この学習、試験のプロセスを通じて得たことを、業務のスキルアップであれ、地域資源の再発見であれ、各自の目的意識やニーズに合わせて活用することを奨励する傾

向にある。たとえば、代表的な「ご当地検定」である「京都検定」は、要求される知識レベルに応じて1級から3級までであるが、最上級の1級は小論文形式の試験まで課し、合格者には京都の魅力の発信や次世代への承継の役割を期待している。また、2級、3級合格者に対しては、京都の伝統芸能に触れてもらうフォローアップの研修を希望者に用意するなど、多様なニーズへ応えようとしている。長崎検定も同様にフォローアップを検討している。

その他の事例：「岡山文化観光検定」、「姫路・観光文化検定」など

このように、「ご当地検定」といっても、その目的や仕組みづくりには多様なものがあるが、「人材育成」と「地域学」という、大まかには2つの方向性があると考えてよいであろう。

なぜ「ご当地検定」が盛んなのか

では、なぜこのように「ご当地検定」が各地で盛んに実施されているのであろうか。

第1に、経済社会が画一化しつつある中で、逆に地域への関心が高まってきているという背景があると考えられる。この地域への関心という要因にも、さらに2通りの考え方があるだろう

一つは、地域への知的関心の高まりである。「ご当地検定」を実施している地域は大都市や城下町など豊かな歴史性を兼ね備えた地域が多く、そこではその歴史性を掘り起こしてみたいという知的関心がそもそも高いのかもしれない（鹿児島の場合、地域性として、そもそも自分たちの地域への関心が特に高いのかもしれない）。また、『団塊の世代』の地域への回帰傾向がよくいわれるが、この世代の知的関心と「ご当地検定」がマッチしているという指摘もある^{viii}。

しかし、今回のブームの中には、そういった知的関心ばかりでなく、地域性の中に今後の地域発展の方向性やビジネスチャンスを見ているのではないかと考えられる。たとえば、「かごしま検定」で地元企業に高い参加意欲がみられたのも、そういった意識が背景にあるのではないだろうか。

第2に最近の資格取得ブームといった要因もあるだろう。事実、資格取得のサイトでも「ご当地検定」が取り上げられており、たとえば前述の「北海道フードマスター」に注目している^{ix}。

第3に、これらの検定が、楽しみながら、あまり深刻にならず受験できるという仕組みを作っている点もあるだろう。カルチャーセンターに代表される日本人の「学び好き」^xや、昨今のテレビのクイズ番組の人気^{xi}を背景要因として指摘する声もある。いずれにせよ、最近の地域づくりの議論では「楽しさ」を演出することで活動のモチベーション維持することの重要性も指摘されており^{xii}、そのことは「ご当地検定」が受け入れられる重要な要素となっていると考えられる。

「ご当地検定」の効果

さて、以上の議論を踏まえて、このような「ご当地検定」はどのような効果を地域にもたらすのか考えてみよう。

「ご当地検定」そのものは基本的には主に地域に関する知識を問う試験である。そのため多くの「ご当地検定」ではテキストを作成し、それをもとに講習を実施し、試験を行っている。もし、「ご当地検定」の直接的な経済効果を問うならば、この試験にかかわる支出程度に過ぎないであろう。むしろ、この「ご当地検定」からどのような波及効果が生じるかが重要である。

現在実施されている「ご当地検定」はいずれも歴史が浅く、そこでの活動成果からこの効果を考えるのはまだ難しい。しかし、前でもみてきたように、「ご当地検定」には、「人材育成」の方向性と、「地域学」の方向性があり、検定のもたらす効果は基本的にこの方向性に沿ったものになると考えられる。

つまり、第1に「人材育成」の側面であるが、観光などの地域産業に従事する人たちがその産業に関して学習を積み重ねることは、その産業のレベルを向上させて競争力の源泉となるとともに、その地域産業の人材開発を通じてその産業の底辺を拡大することにつながるであろう。一方、多くの人々がその地域それ自体について多くの知識を持つことは、あたかも地域住民全体がその地域の観光情報の発信者になるような効果を持っているだろう。

現在のように、観光が地域産業活性化の戦略的分野となっている地域が多く、それら地域間の競争が激しくなっている状況下では、特に観光関連事業者のレベルアップ、そして地域住民全体のホスピタリティの質の向上が必要とされていることは論を待たない。鹿児島の場合でも、観光産業などのレベル向上の必要性は指摘されている^{xiii}。参加者が楽しみつつ、同時に資格取得の満足感を与えるような「ご当地検定」の手法によって、地域全体のホスピタリティを向上させることは、こういった地域課題の効率的な解決手法と考えられる。

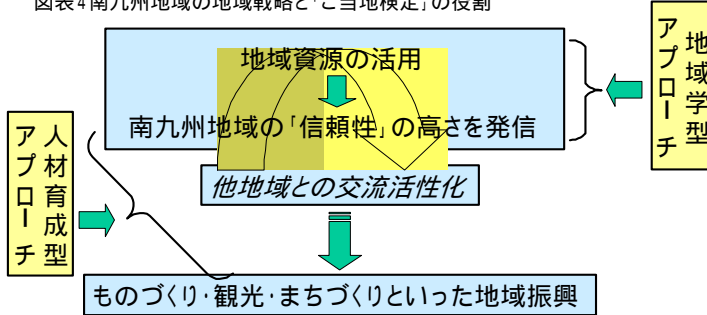
第2に「地域学」的な側面であるが、このような地域資源に関する認識や関心が高まることを通じて、この地域資源を維持、発展させようとする試みや、それらを利活用する試みが活発化する契機を提供する効果が考えられる。たとえば、ある景観の保全の議論を行うにしても、その景観の持っている価値について多くの人々の理解を得ていないとその事業は進まない。その際、「ご当地検定」を通じて地域資源などに関する共通の理解の土台ができていれば、より有意義な議論や活動が可能となるであろう。

これまでの議論を、南九州地域の地域戦略モデルとあわせて整理してみよう。

図表4は2004年12月に弊行南九州支店で発表した「地域づくり活動中期ビジョン」のエッセンスを

まとめてみた図である^{xiv}。約言すると、南九州地域の地域資源を活用して国内外に当地域の「アピールポイント＝信頼性（安心・安全）」の高さを発信し、それによって観光など他地域との交流を活発化させる。その積み重ねの中から、ものづくり・観光・まちづくりなど地域振興を図っていく、といった地域振興モデルである。

図表4 南九州地域の地域戦略と「ご当地検定」の役割



出典：日本政策投資銀行南九州支店作成

このモデルの中で、どのような地域資源があるかを把握し、それらを活用して地域のアピールすべきポイントを作り出していく過程では、地域資源の再認識、共有化を図っていく、「地域学的」な取り組みが必要となってくるであろう。

また、そのアピールポイントを発信して、地域間交流を活発化させ地域振興に結びつける過程においては、観光産業などのレベルアップ、地域全体のホスピタリティ向上は不可欠であり、そこでは「人材育成」の取り組みが必要とされる。

このように見ていくと、南九州地域のこれからの地域振興を考える上で、必要とされる「地域学的」な取り組みと「人材育成」の取り組みを、「楽しみ」の演出において効率的に行える「ご当地検定」は、単に資格取得の手段やマニアのためのイベントという見方には収まりきらない広がりを持っているといえるだろう。

今後何が必要か

「ご当地検定」の効果をこのように考えると、この検定自体は、検定に合格することも大事であるがそれ以上に、この検定にかかわった人々がこれからどう行動するかが重要であることがわかってくる。つまり、「ご当地検定」は、あくまで地域の活性化のプロセスの入口に位置しているのである。

そう考えると、地域振興という観点から今後必要とされる点も見えてくるのではないだろうか。

すなわち、こういった検定を実施するサイドに関しては、その目的が「人材育成型」であれ、「地域学型」であれ、受験までの学習と、受験後のその経験の活用の場づくりがやはり重要なのではないだろうか。

また、地域を活性化するためには、できるだけ多くの人を経験することも望まれる。そのためには、「楽しさ」の演出と合格後のフォローアップがやはり必要となるだろう。

もちろん検定の類型ごとに目指していく方向性に違いはあろう。たとえば、「人材育成型」であれば、合格者のキャリア形成に寄与できるような、雇用者側の啓蒙、継続的なスキルアップの支援、雇用情報の提供のレベルアップが必要であろう。

「地域学型」の場合は、検定参加者に対するネットワークを形成して、地域資源に関する関心を行動に移していく仕掛けが生まれるような場づくりが必要となってこよう。

そして、「中間型」は受験者の多様性を意識して、その目的にあった場の提供をしていく必要があるだろう。この類型の場合、一般に「試験問題が知識偏重ではないか」、「観光ガイドに要求される資質と検定試験に乖離があるのではないか」といった声もあるようである。この類型は受験者のニーズに幅広く応えていこうとするコンセプトであるため、このような反応はある程度仕方ないところもある。私見ではあるが、上級者に対しては「知識系コース」「プロフェッショナル系コース」のような目的別コース分けにより、多様なニーズに応えていくというやり方もあるのかもしれない。

そして、一層重要なことは、この検定の受験者自身が、この検定が地域経済社会に与える効果がどのようなものか、自分なりに理解することではないだろうか。検定を実施するサイドの役割は、あくまでも「場」づくりである。この経験を、「楽しむ」気持ちも忘れず、地域振興に活かしていくのは、やはり受験者の主体的な意識次第なのではないだろうか。

いずれにせよ「ご当地検定」の取り組みは全国的にみてもまだ始まったばかりであるが、合格発表が終了してからがその取り組みの真価を発揮する場になるであろう。

- ⁱ 鹿児島商工会議所発行「かごしま検定」パンフレットより引用。
- ⁱⁱ 鹿児島商工会議所は、2006年10月に「第2回かごしまマスター試験」、「第1回かごしまシニアマスター試験」を実施する予定である。なお、「上級試験」は2007年度以降実施予定である。
- ⁱⁱⁱ 2006年4月17日南日本新聞記事から引用。
- ^{iv} 辻田 [2005] より引用。
- ^v 受験者の約3割は京都府外の在住者だった(辻田 [2005])。
- ^{vi} この分類は、それぞれの検定の目的などを記載した文書などを参考に筆者が大括りに整理したもので、もとより厳密なものではない。
- ^{vii} 根本 [2005] を参照。なお、「地域学」には海外の地域を総合的に研究する学問を指す場合もあるが、その点は今回は触れない。
- ^{viii} 2005年10月27日読売新聞記事を参照。
- ^{ix} たとえば、いぬかいはずき [2005]。
- ^x 戸祭 [2006] を参照。
- ^{xi} 辻田 [2005] を参照。
- ^{xii} 日本政策投資銀行九州支店、(財)九州経済調査協会 [2005] を参照。
- ^{xiii} 其田 [2005] を参照。
- ^{xiv} 日本政策投資銀行南九州支店 [2004] を参照。

【参考文献】

- いぬかいはずき [2005] 「仕事に活かせる「ご当地検定」現る?!」, All About社HP掲載 (<http://allabout.co.jp/study/cqualification/closeup/CU20051103A/>, 2006.19ダウンロード)
- 其田秀樹 [2005] 『其田秀樹の観光かごしま「10の提言」』
- 戸祭達郎「ご当地検定 地域文化・歴史の伝承の新しいかたち」, 立命館大学校友会報『りつめい』2006年1月号
- 辻田昌弘 [2005] 『「ご当地検定」がブームです』, 21世紀政策研究所HP掲載 (<http://www.e-demo.org/modules/news/article.php?storyid=53>, 2006.19ダウンロード)
- 日本政策投資銀行九州支店、(財)九州経済調査協会 [2005] 『実践から読み解く地域再生戦略;九州の11事例からみる地域経営のポイント』
- 日本政策投資銀行南九州支店 [2004] 『信頼性のブランド化;南九州から日本を変える』
- 根本祐二「地域間競争と地域学の今日的役割」, 『地域開発』2005.11 vol.494

〒892-0842 鹿児島県鹿児島市東千石町 1-38
日本政策投資銀行南九州支店(支店長: 濹澤 洋)
お問い合わせ先: 企画調査課 中村聡志
Tel : 099-226-8203 E-mail sanakam@dbj.go.jp